

第三種郵便物認可
平成 29 年 1 月 17 日(火曜日)

平成二十九年一月十七日

A J U 通巻二二四八〇号

昭和五十四年八月一日第三種郵便物認可(毎週火曜日発行)

A
J
U

みずほ

NPO 法人脳外傷友の会みずほ
会報 第 70 号



2017 年 1 月 17 日
NPO 法人 脳外傷友の会みずほ発行
〒460-0021
名古屋市中区平和 2-3-10
仙田ビル

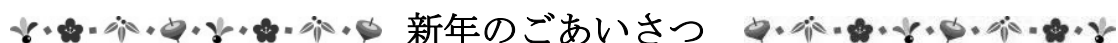
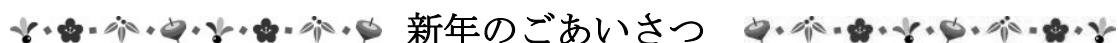
電話/FAX 052-253-6422
メールアドレス npo-mizuho@miracle.ocn.ne.jp
ホームページ <http://www.npo-mizuho.com>



絵 : 大藪 尚史さん (年賀状)

目次

新年のごあいさつ	2
高次脳機能障害を知ろう	3
第 16 回全国大会 in 高知	4
脳外傷リハビリテーション講習会	8
地区会だより	12
ミラクル&レディースの会	13
若い失語症者のつどい	14
みんなで盛り上がったクリスマス会	15
ワークハウスみかんやま	16
第 2 回家族勉強会	19
お知らせ&報告	20

 新年のごあいさつ 

脳外傷友の会みずほ理事長 吉川雅博

みずほ会員のみなさま、新年あけましておめでとうございます。

平成 29 年は、みずほ 20 周年という節目にあたります。この 20 年を振り返ると、高次脳機能障害は長年「制度の谷間」の障害と言われ、公的支援が受けられませんでした。国の高次脳機能障害支援モデル事業で、「高次脳機能障害診断基準」などが作成されたことから、平成 17 年度より発達障害者支援法の対象となり、精神保健福祉手帳の取得が可能となりました。その結果、障害者総合支援法の各種サービスが利用可能となりました。

「制度の谷間」の障害から、現在の状況に到達できたのは、約 20 年間の日本脳外傷友の会や全国の友の会、医療関係者などのみなさまの努力の結果だと思います。まだまだ「親なき後の問題」「就労支援」など高次脳機能障害者の自立と社会参加に向けて、課題は山積です。会員のみなさまと共に、できることをコツコツ実行していきましょう。

今が障害者も就職のチャンス？

さて、今日本の企業は人手不足で困っているようです。2015 年 2 月に帝国データバンクが発表した「人手不足に対する企業の動向調査」（調査対象は全国 2 万 3,402 社、回答率 46.1%）によると、企業の 37.8%で正社員が不足していると回答。「情報サービス」「建設」や「医薬品・日用雑貨品小売」など、専門知識・スキルを必要とする業種で人手不足が深刻となっている。とりわけ「金融」「旅館・ホテル」「メンテナンス・警備・検査」など、金融緩和による円安の好影響やオフィスビル需要の拡大を受けた分野で不足感が急拡大している。また、非正社員では企業の 24.1%が不足していると感じており、特に「飲食店」「旅館・ホテル」「飲食料品小売」などで高い。訪日海外旅行客数の増加とともに、消費者と接する機会の多い業種で不足感が高まっているということです。

また、平成 25 年度の障害者の職業紹介状況等のデータ(厚生労働省)によると、ハローワークを通じた障害者の就職件数は、4 年連続で過去最高を更新し、就職率も 45.9%と 4 年連続で上昇したそうです。職業別では、「運輸・清掃・包装等の職業」の割合が大きく、「事務的職業」「サービスの職業」「生産工程の職業」「専門的職業」が続いています。障害別で見ると、身体障害については「事務的職業」の割合が、知的障害者については「運輸・清掃・包装等の職業」の割合が他の障害種別に比べて高い状況となっています。

就労支援をしている方々は、上記の内容をご存知でしょうか？障害者の就職は今がチャンスであるということになりませんか。人手不足の業界や障害者雇用の実績のある業界に、積極的にアプローチしてみる価値は十分にあるのではないのでしょうか。

平成 29 年 1 月 17 日(火曜日)



会員の皆様、支援者の皆様には新春をお健やかに迎えのこととお慶び申し上げます。脳外傷友の会みずほの運営も、行政機関のご指導と皆様の温かいご支援・ご協力をいただいておりますことに、厚くお礼を申し上げます。脳外傷友の会みずほは、今年 20 年を迎えるにあたり 5 月 20 日(土) 記念行事をとりおこないます(P20 参照)。今後も、活動の充実に向けて皆様とともに歩んでいくことができれば幸いです。

本年も皆様のご健勝とご多幸を心より祈念申し上げます。

河田幹子



「高次脳機能障害を知ろう！ ～ どんな障害？どのように支えていけばいいのか ～」

11 月 12 日(土) 名古屋市中区自立支援協議会 福祉ふれあいサポーター一部会主催の勉強会を開催しました。見た目にはとてもわかりづらいこの障害について、地域の方々に理解を深めていただくことができました。(参加者 24 名)



ワークハウスみかんやまでの作業の様子を見ていただいた後、利用者 3 名の体験談を交えながら、高次脳機能障害について話をさせていただきました。同じ障害なのに一人ひとり違うことから、障害も含めその人を理解したうえで寄り添った支援、その時々状況に見合った支援が必要であるだけでなく、継続して取り組むことの重要性も合わせて説明させていただきました。

利用者自身の体験談

ご参加いただいたみなさんからの感想(抜粋)

- ・感情のコントロールも障害から来ていることがわかり、かける言葉も言い方を変えることや、何ができるのかを考えることも必要だと思った。
- ・当事者の方からお話を伺い、人それぞれ違うことを理解することが大切と感じた。
- ・施設長やスタッフのがんばりが当事者によく伝わっていると感じた。
- ・実際の作業場面を見ることによって、支援へのイメージがしやすくなった。
- ・3 名の利用者さんの体験談からは、それぞれ事情は異なるものの、日常生活や作業において前向きに取り組む様子や頑張りが伝わってきてよかった。

その他、より具体的な対処法が知りたい、人間関係・友達・近所づきあい・仲間づくりなどについても話を聞きたいといったご意見もいただきました。当事者を取り巻く環境はとても大切です、今後も地域の方々との連携を重視していきたいと考えます。

日本脳外傷友の会 第 16 回全国大会 2016in 高知

「見えない障害?」「見てない障害」～もっかい考え直さんかえ～

「全国の脳外傷友の会及び関連団体の当事者・家族・支援者が交流、親睦を深めるとともに、高次脳機能障害者の支援の現状、課題を把握し、日常の諸問題をどのように克服し、社会参加していくべきか地域支援の在り方を問う」を大会趣旨として高知県で開催されました。10月7日(金)は、関連行事(高次脳機能障害支援コーディネーター研修会、子どもを含む高次脳機能障害家族部会、NPO 法人日本脳外傷友の会運営委員会)と交流会が行われました。交流会では、鯉のたたきやウツボのから揚げなど高知の海の幸・山の幸に舌鼓を打ちながら、なつかしい顔ぶれとの再会や新しい出会いに場は盛り上がりました。



8日(土)は、当事者活動奨励賞授与式に始まり、今年度就任された古謝理事長より、「当事者活動奨励賞授与式は大会のメインイベント、全国でがんばって活動している当事者をみんなで応援してください!」とあいさつがありました。その後、ガイダンス講演と2つの基調講演、シンポジウムが行われました。(受賞内容は、昨年12月にお届けしたJTBLA Letter 2016 october10 をご覧ください)



ガイダンス講演

慈恵会医科大学教授の渡邊修氏を座長に、黒岩勉氏(国交省 自動車局保障制度参事官室 被害者保護企画調整官)、萩庭圭子氏(文科省 初等中等局特別支援教育課調整官)、野口勝則氏(国立リハビリテーションセンター 職業指導部長)がそれぞれのお立場で講演されました。黒岩氏からは、NASVA(ナスバ: (独) 自動車事故対策機構)による被害者援護業務内容など保険金だけでは救われない被害者の救済にどうかかわっているか、国は全国に157か所の短期入院協力病院と49か所の短期入所施設が整備していること、また2級以上でないと利用不可かとの質問には、日弁連の専門家・弁護士がかかわり補助費を出している状況で介護料受給者は対象だが3級以下はないといった説明がありました。

(最近みずほでは、無理では?と思われた会員さんの申請が通りました!!)

渡邊氏からは、NASVAの短期入所施設についてはソーシャルワーカーもよく知らないのが現実、みなさんもホームページなどを見て知っておくことが必要だと付け加えられました。

萩庭氏は、特別支援教育の理念やインクルーシブ教育(障害のある子どもを含むすべての

第三種郵便物認可

平成 29 年 1 月 17 日(火曜日)

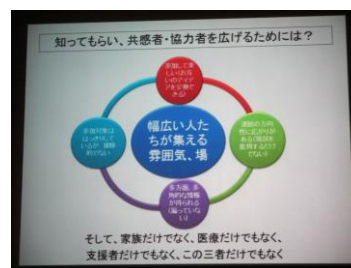
子どもに対して、子ども一人一人の教育的ニーズにあった適切な教育的支援を、「通常の学級において」行う教育のこと)の基本的な考え方について話されました。病気・障害の理解だけに目がいきがちだが、大切なのは子どもを理解したうえで適切にかかわることだと話されました。また、教育を目指す全ての学生に特別支援教育を必修へと検討中で、指導要領の改訂に取り組む方向で考えているとのことでした。会場からは、支援コーディネーターとして関わる立場から、個人情報への壁に苦慮しているとの意見も出ていました。

野口氏は、障害者の就労・雇用支援制度等の概要、高次脳機能障害のある方への就労支援における課題と対処法などを話されました。就職あるいは復職において個々の障害特性をうまく伝えていくことは大事で、ジョブコーチを派遣して対処法の習得につなげる取り組みなど支援機関と連携が鍵を握ること、軌道に乗って就労しても途中挫折した場合には県内の地域職業センターに相談するのが良いとのアドバイス。また、自己管理能力や生活のリズム確保など当事者自身の取り組みも必須です。その他、障害者職業能力開発校は他県との相互乗り入れも可能との情報もいただきました。

渡邊氏から「支援とは、個人個人の症状に対し細やかなテクニックをもって行われるもの、全体を支える制度、つまり成長を支えていくものだと思う」と言葉を添えられました。

基調講演 1

社会福祉法人グロー (GLOW) 理事長の北岡賢剛氏より「滋賀県における高次脳機能障害支援の現状から、今後の支援を考える」と題して二つの事例を交えての講演。そこから見てきたことは、早期の正しい診断がなされさえすれば、早いうちに社会とのつながりを習得させるべく関わりが持てるということです。しかし、深刻な問題を抱える事例であるがために施設に断られてしまうなど社会福祉サービスに結びつかない現状があることも話されました。厚労省・社会保障審議会障害部会の報告では、十分な支援ができていない高次脳機能障害の人がいることを認めている内容がある。しかし、発達障害者支援法は 10 年前の施行後、見直しから改正法も成立しているのに対し、高次脳障害者支援法に至ってはとっかかりすら見えていない遅れた現状を厳しく指摘されました。最後に、来賓の国会議員 山本氏に対して意見を求めたうえで、法案の作成と成立への協力を呼び掛けられました。



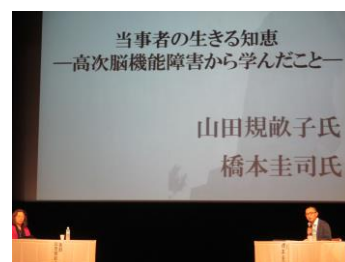
基調講演 2

高次脳機能障害の当事者であり医師の山田規畝子氏と、高次脳機能障害支援を専門とする橋本圭司氏による対談が行われました。脳梗塞を 3 回体験された後も多方面で活動され

第三種郵便物認可

平成 29 年 1 月 17 日(火曜日)

ている山田氏の「当事者の生きる知恵」を橋本先生の軽妙なトークで引き出していました。家族と心からのコミュニケーションがとれなくなった人には、「あなたのことが知りたい」と興味を持って話を聴いてあげてほしいとのことでした。人に興味を持たれることで脳に良い刺激となり、気持ちは前を向くそうです。医師やヘルパーなど、様々な支援者には、今持ち合わせているノウハウ以上に当事者に共感する材料を持ち、十分に想像力を働かせて寄り添ってほしいとのことでした。



シンポジウム

南国病院副院長の宮本氏、高知ハビリテーリングセンター センター長の上田氏の進行で、支援者の立場から森氏（県）・伊藤氏（職業センター）・岡本氏（友の会「青い空」）を交えて、脳外傷友の会高知「青い空」の当事者 片岡氏とご家族の小松氏の今日までが紹介されました。高知弁でのタイトル～そのままかまんちゃ～が垣間見られた内容に、会場から意見や感想の手があがっていました。次回の開催地、岐阜が紹介され、最後に大会アピール文を採択して閉会しました。

『日本脳外傷友の会 全国大会（高知県）に初めて参加しました。』

全国大会に初めて参加しました。盆踊り調の高知県の曲が今も耳に残っています。数十回聴かないと覚えられない私が、数回聴いただけで覚えてしまう高知ソングはすごいです。晴れて高知城も桂浜も楽しめましたし、自分で鰹を薫焼きして食べるランチは絶品でした。交流会で、全国の皆さんがよさこいを踊りながら席の周りを回る姿は、大きな力が渦巻くようで圧巻でした。高知の家族にはポジティブ力があるという「高知家」の文字を、街でよく目にしました。縁のある人がチームになって前向きにしていく、という意味です。私事ですが、家族が障害を理解してくれず、追い詰められて一人暮らしを始めることになりましたが、母が病気になりました。唯一の相談相手と会話が成り立たない状態です。元気な母がいる前提で考えていた生活は脆く、一気に総崩れになるところを、名リハの先生、支援員さん、NPOや当事者の方、勤務する会社の方に支えていただき、踏ん張って立つことができています。講演会で、良い方向へ変えていこう！と全国のこの障害に関わる方の熱い思いは、泣きそうになりました。こんなに沢山の方が頑張っているのだ、と知ることができて参加して良かったです。（Nさん）

